

「骨太の方針」

まだ呼びびますか？

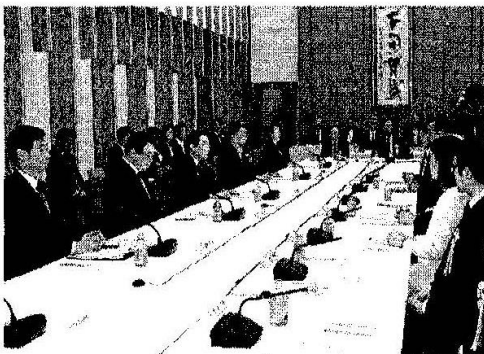
政府の「経済財政運営と改革の基本方針」が今月半ばにも閣議決定されるが、気になるのが「骨太の方針」という通称だ。初登場は二十年以上前。最近では、中身がその名に伴わないと批判される。「骨太」と安易に呼び続けるべきか。政治の過大フリーズをどう扱うべきか。

(大杉はるか)

「骨太の方針」は翌年度「の予算案を固める年末に向け、重点施策や成長戦略、財政改革などを一体的にまとめるもの。今年にはマイナンバーカードの活用促進などデジタル化の推進、少子化対策、賃上げ実現などが盛り込まれる見通しだ。初策定は小泉政権発足後の二〇〇一年六月。中央省庁再編で同年に発足した「経済財政諮問会議」が民主党政権時の〇九―一二年を除き、毎年まとめている。

「骨太」の通称は、〇一年四月まで財務相だった宮沢喜一氏が「骨太の問題を集約・提起し予算をリード

中身伴わず 骨抜き状態



する」よう求めたのがきっかけとされる。宮沢氏は国会でも「この会議は予算編成について骨太な意見を言われること」などと「骨太」を複数回使っている。広辞苑(第七版)によると、骨太とは「骨格の丈夫なこと、内容・方針がしっかりしているさま」を意味する。だが近年の骨太方針は、肝心な部分が盛り込まれない骨抜き状態に近い。昨年は防衛力を五年以内に強化し、防衛費を国内総生産(GDP)比2%程度に増額する方針を示したが財源は明示せず、二五年度としてきた基礎的財政収支(プライマリーバランス、

首相官邸で開かれた経済財政諮問会議=5月15日、東京・永田町で

PB)黒字化目標も消えた。今年も「異次元の少子化対策」とされる児童手当や育児休業給付拡大などの財源明示は見送られそうだ。

「一番迫力があつたのは『骨太方針2006』。PB黒字化目標と本筋にリンクした歳出改革と成長戦略だったからだ」。〇六年版を評価するのは元大蔵官僚で法政大教授(公共経済学)の小黒一正氏。同方針では、五年間で社会保障や人件費、公共事業などの伸びを抑制する具体的な数値が記されていた。

対照的なのが、安倍晋三氏が首相に返り咲いた二二年以来。異次元の金融緩和や機動的な財政出動をうたうアベノミクスが始まる。「財政規律が弱まり、今も緩んだまま。金利が上がらないため、国民の間でも財政健全化への危機感が醸成されない。〇六年のような歳出改革の機運が盛り上がっていない」

短期的な政策優先の安倍政権は骨太方針を重視しなかった。岸田政権はどうか。

小黒氏は「改革のエンジンとして使うかどうかは、リーダー次第」と指摘し、「財政改革をしよつとすれば、賛否が割れる。郵政解散を断行した小泉純一郎首

横行する過大フリーズ「検証必要」

相のように、党内の反対派を抑えるだけの力がないと実行できない」と続ける。

「骨太方針」をはじめ「一億総活躍」や「生産性革命」など、政治の場では過大広告的なフリーズが少なからず用いられる。それはなぜなのか。

ジャーナリストの鈴木哲夫氏は「これやります、あれやります」と打ち出せば、選挙で有利になるとみる。「今回の骨太に入る少子化対策も『手当を増やします』というだけの話。社会を大胆に変える中身ではない。小泉時代のように議論の突破口にするわけでもなく、政治利用しているだけ。加えて官僚も予算確保の布石として利用している」と続ける。

政治ジャーナリストの角谷浩一氏は「重要なのはフアクトチェック。メディアや野党による検証だ」と強調する。「キヤッチフレーズの達成度を事実で示し、担当官僚には『所管外』などと逃れさせず、責任をとりせないといけない」